

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会  
生活・総合的な学習の時間ワーキンググループ（第9回）

1. 日 時 平成28年6月17日（金）15時30分～17時30分
2. 場 所 文部科学省 3F1会議室
3. 議 題 (1) 生活科の改善・充実について  
(2) 総合的な学習の時間の改善・充実について

**【見上主査】**

それでは、定刻になりましたので、ただいまより中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会生活・総合的な学習の時間ワーキンググループの第9回を開催いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、桶田委員、黒上委員、徳山委員、奈須委員、野田委員、若江委員の皆様が御欠席となっております。それでは、本日の配付資料の確認を事務局からお願いいたします。

**【小野教育課程課課長補佐】**

配付資料を確認させていただきます。本日は、議事次第に掲載しておりますとおり、資料1から4までと、その他、机上に参考資料を配付をさせていただいております。参考資料としまして、後ほどまたお時間を頂いて御紹介させていただきます「小学校段階におけるプログラミング教育の在り方について」という議論の取りまとめの資料等を入れてございます。不足等がございましたら、事務局にお申し付けくださいますようお願いいたします。

**【見上主査】**

それでは、議事を進めてまいりたいと思います。本日は、前回に引き続きまして、生活科・総合的な学習の時間における取りまとめ案について議論してまいりたいと思います。本日のワーキンググループの流れといたしましては、前半で生活科のまとめ案を議論していただきまして、後半で、総合的な学習の時間のまとめ案を議論してまいりたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、まず、生活科のまとめ案について、事務局より説明をお願いいたします。その際、併せて、プログラミング教育に関しまして、小学校段階における論理的思考力や創造性、問題解決能力等の育成とプログラミング教育に関する有識者会議の報告書案についても御説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【大杉教育課程企画室長】

失礼いたします。それでは、まず最初に、プログラミング教育の方を、主に高学年中心になってまいりますので、生活科よりは、総合的な学習の時間の方が関連してくるわけではございますけれども、冒頭に少し御説明を申し上げたいと思います。少し唐突な感じをお受けになる方もいらっしゃるかもしれませんが、少しお時間を頂いて御説明をさせていただければというふうに思います。

プログラミングに関しましては、本日、参考資料というもので議論の取りまとめ、6月16日付けで取りまとめたものでございます。これと、議論の取りまとめの1枚紙のポンチ絵、それから、今、追加で有識者会議のメンバーをお配りをさせていただきました。中教審の小学校部会の主査であります天笠先生、それから、同じく中教審の情報ワーキングの主査であります堀田先生、それから、本ワーキングのメンバーにも御協力を頂きながら、また、総合的な学習の時間に加わっておられます小学校の先生にも御協力を頂きながら、議論を進めさせていただいたところでございます。取りまとめがまとまりましたので、御報告をさせていただきます。

参考資料の文章の方を御覧いただければというふうに思います。「小学校段階におけるプログラミング教育の在り方について」ということでございます。

「有識者会議の議論の視野」とございますけれども、御覧いただいたように、分野、こういった専門家が知見を持ち寄り、特に小学校段階におけるプログラミング教育の意義や在り方について、認識の共有を図り、今後の円滑な実施につなげていくことを目的とした会議でございます。

そもそも、プログラミング教育とは何か、それを通じて育む力とは何なのかというところにもまだまだ共通理解がない状態でございましたので、そこにしっかりと認識の共有を図っていくために議論をしていただいたものでございます。

また、二つ目の丸にございますように、現在かなり学校と民間が連携した意欲的な取組が広がりつつあります。そうした中で、特定のプログラミング言語を覚えるというようなことにプログラミング教育の目的があるのではないかというような誤解が広がりつつあったり、小さいうちにコーディング、こういったプログラミング言語を覚えさせないと、子供が将来苦勞するのではないかといったような観点からの加熱ぶりということも見られるところでございます。

実際、総合的な学習の時間におきましても、プログラミング教育、広がりつつあります。

その他、各教科におきましても実施が広がりつつあるところがございますけれども、そうした中で、本当に総合の探究というものもしっかり内容が掛け合わされた活動になっているかどうかということ、あるいは、理科においても、ともすれば、ブロックで作ったカエルを動かして、生物というような理科の教科の学習と掛け離れたところで活用されてしまっただけは少し困りますので、そういったことも含めて、しっかり定義を付けてやっていくということが求められる段階にあるということでございます。

そうしたことから、三つ目でございますように、プログラミング教育とはとありますけれども、プログラミングを体験しながら、子供たちがプログラミング的思考を育むということを主眼として、しかも、教科でやる場合には、既存の教科の内容としっかり掛け合わされるような教科の中で学ぶ必然性があるというような形で実施をされるようにということで整理をさせていただいたところがございます。また、併せて、読解力、言語能力の必要性ということがますますこの情報化の中で高まってまいりますので、こうしたことも整理を頂いたところがございます。

おめくりいただきますと、2ページに、いわゆる「第4次産業革命」は教育に何をもたらすのかということがございます。いわゆるIoTと言われるようなものの働きがインターネット経由で再定義化されるというようなこと、また、人工知能の予測を超えた進化ということが言われていることとございますけれども、これがある意味、農業革命以上の社会的な変化をもたらすというようなことも言われているところがございます。

そうした中で、学校で教えていることが普遍的な価値を持つということ、子供たちに社会、どのような社会になったとしても、必要な力が身に付くということとをしっかりと保証していくということが学校教育の役割として求められているということ。ある意味、社会もそうした学校教育が本来的に本質的に目指してきたところを共有できる状況にあるということ、単にマニュアルをこなすということを超えて、創造的な力を発揮していくということとを産業界が求める人材像としても求められているというような一致が見られるのではないかなというようにございます。

そうした中で、3ページ目は、社会に開かれた教育課程の下、子供たちがよりよい人生を切り開き、よりよい社会づくりを目指していくということのために、必要な教育課程ということとをしっかりと整備していくということ、未来のつくり手として必要な力をということとでございます。

「学ぶ」ことの意義と、これからの時代に求められ全く力の再確認というところござ

いますけれども、人工知能の脅威ということも言われるわけがございますけれども、いずれにしても、人工知能は与えられた目的の中で処理を行うという存在であるということ、一方で、人間は感性を働かせながら、その目的自体を自ら考え出すという存在であるということ、複雑な文脈の中でも、そうした目的を設定して、多様な他者と協働しながら、考えをまとめたり、問題解決をしていくことができるという人間の強みがあるということ、それを支えるのが人間の学習であるということがございます。

現在、中教審全体で御議論いただいている、どのように学ぶのかということを含めた指導要領の在り方も、こうした人間の強みということをますます強みとして伸ばしていくということでもあるということがございます。

また、4ページ目は、「次世代の学校」の在り方ということで、ICTの強みを生かした学校づくりということがございます。

これからの時代に求められる資質・能力とはということで、これはもう既に論点整理で整理していただいたこととも重なる部分でございますけれども、5ページにございますように、情報化の中でしっかりと情報を読み解いていく力、子供たちが教科書を読み解けていないのではないかと指摘もあるところで、国語教育を中心に、しっかりとテキストを理解し、表現していくという力を鍛えていくことの重要性でございます。

また、ICTを使いこなしながら問題解決をしていく、新たな価値を創造していくということの力、6ページ目にもございますように、コンピュータということの働きを理解しながら、問題解決に活用していくということ、その中で、プログラミング的思考ということの重要性も指摘をされています。

また、6ページ目、下にございますように、人間の強みである感性を働かせながら、よりよい人生や社会の在り方について考え、学んだことを生かしていく。これも現在、学びに向かう力、人間性ということの中で御議論を頂いているところでございます。

7ページ目にございますように、コンピュータと人間の在り方ということで、例えばプログラミング言語自体は時代によって変わっていくわけがございます。数十年先には、もしかしたら自然言語でコンピュータに指示可能になるのではないかとということも言われているわけがございますけれども、仮にそのような時代になったとしても、論理的に思考しながら、そのコンピュータを活用していくことの重要性は変わらないのではないかと。こうした時代を超えて変化の中でも普遍的に求められる力を見据えながら、育てていくことの重要性ということがございます。

こうしたことを踏まえながら、8ページ目が、学校教育として実施するプログラミング教育は何を目指すのかということでございます。知識・技能、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力、人間性でございますが、特に思考力・判断力・表現力のところでございます。プログラミング的思考、論理的思考の一部であると考えられますけれども、特にコンピューテーション・シンキングということの考え方を踏まえながら、意図する一連の活動を実現するためには、どのような動きの組合せが必要であり、どのように組み合わせ、それを改善していけば、意図した活動に近付くのかということ論理的に考えていく力として有識者会議で定義を頂いたところでございます。

こうしたことを、9ページ目でございますように、発達の段階に即して育んでいくということ、中学校技術・家庭科では、今回、プログラミングに関する時間を倍増するということが検討されております。また、高等学校では、情報化ということを共有必修科目としてプログラミングを全ての高校生が学ぶということになってまいります。そうした中で、小学校で体験的にプログラミングに触れ、プログラミング的思考ということ小学校の発達段階に即した形で育んでいくということが求められているということでございます。

小学校における在り方ということで、小学校、特に6年間幅のある発達段階の中で、子供たちの成長に寄り添いながらという視点が重要であるということでございます。

具体的な知識という中でのプログラミングの作成につながる具体的な力ということは中学校や高校の段階でも育まれるということで、小学校、具体的な身近な出来事から抽象的な思考に向かうという段階で、どのような学習が求められるのかということでございます。

11ページ目に具体的に、各小学校の実情を踏まえた柔軟で学習成果のある教育内容の在り方ということでございますけれども、結論から申し上げますれば、何かしら内容を増やすということではなくて、既存の内容、理科なり各教科、あるいは、総合的な学習の時間で情報に関する学習をする際ということの中で、プログラミングを体験しながら、学びを深めさせていただくということでございます。こうした単元を、高学年を中心に念頭に置かれておりますけれども、どこかで必ず設けていただくというようなことを総則に位置付けていくということになるのではないかとございます。

より具体的には、12ページ目に、総合的な学習の時間とございますけれども、情報に関する課題を探究する中で、例えば、暮らしの中でプログラミングが活かされている例、お掃除ロボットでも、何かしら、自動販売機でも、いろんなところでプログラミングが生きているわけでございますけれども、そうした社会の中で生きているということとの関係性

を考えながら体験していくということ、様々な便利な機会が魔法の箱ではなくて、人間の英知が生み出したものであるということに気付きながら、プログラミングを体験していくということでございます。

また、こうした情報以外にも、地域の課題や環境に関する課題というのに取り組む際に、何かしらプログラミングということの接点があるのかどうかというのは今後しっかりと検討していくということでございます。

それから、理科におきましては、電気の働きということの中で、プログラミングにも触れていくということ。算数につきましては、単純に計算を代行するというだけでは計算力が身に付きませんので、計算ということではなくて、例えば図の作成ということを考えていけるのではないかとということ。音楽においては、創作用のICTツールということで、音を合成していくということで、プログラミングとの関係性ということ。図画工作におきましては、何かしら自分が作ったものを動かしてみることの中で経験ができるのではないかとということ。特別活動におきましては、クラブ活動で子供の興味に応じた活動が考えられるのではないかとということでございます。

いずれにつきましても、実際実施していただくに当たっては、指導事例集のようなものも必要になってまいりましょうし、また、何よりもICT環境の整備ということが必須でございますので、こうしたことと併せて、2020年に向けてしっかりと準備を進めていきたいということでございます。

また、学校で全てをやるということではなくて、学校でそういった機会を作って、興味を持った子供は、学校外の様々な経験につなげていけるということで、官民連携したそういった体制づくりということもしっかりと進めていきたいということでございます。そうしたことが15、16、17ページに記されているということでございます。

こうした観点から、少し総合的な学習の時間のまとめの方には、プログラミングについても触れていただく必要があるかと存じますけれども、まずは、そういった議論の状況について御紹介をさせていただきました。

#### 【小野教育課程課課長補佐】

続きまして、生活科の議論のまとめ案につきまして御説明をさせていただきましたから、御議論いただければというふうに存じます。

お手元の資料で参りますと、2-1から2-7までが生活科のこのまとめに関する資料でございます。前回、第8回のワーキンググループで、初めてこの資料2-7の形でまとめのイ

メージを御議論いただきまして、今回はそれを主に修正した部分を中心に御説明させていただきまして、また御議論を加えていただくことができるといふふうに思っております。

資料2-7につきましては、委員の先生方のお手元には、同じ資料2-7という番号になってはいるんですけれども、見え消しという形で、前回お出しした文章から修正した箇所が、上から線を引いたり、文字をこうやったりした形で見え消しという形で作っているバージョンと、中身は同じでございますけれども、それを溶け込ませたものという形の2バージョンを御用意させていただいております。

主に、私から御説明させていただくに当たりましては、前回からの変更点を中心に御説明させていただければと思いますので、お手元の2-7のうちの見え消しと書いている方をお手元、御覧いただきながら、御説明させていただければと思います。

資料2-7の生活科の部分の議論のまとめ、たたき台のイメージでございます。

前回、全体の御説明をさせていただきましたが、最初に、これまでの成果と課題ということで、生活科ができてからの経緯ということを1ページ目に上げており、それから、2ページ目には、課題として、課題と上げておりますけれども、今できてないということだけではなくて、これから更なる充実を図ることが期待されるという点も含めまして、大きく4点を上げております。

一つ目は、活動や体験を行うことで、低学年らしい思考や認識を確かに育成し、次の活動につなげるような学習活動を重視すること。二つ目は、幼児教育において育成された資質・能力を存分に発揮するということからのつながりを考えるということ。三つ目も、幼児教育との関係でありますけれども、この幼児教育との連携や接続を意識したスタートカリキュラム、これが生活科固有の課題ではなく、教育課程全体を視野に入れた取組とすること。それから、四つ目には、社会、理科、総合的な学習の時間をはじめとする中学年の各教科等への接続という視点という四つの課題につきまして、御議論を頂いてきました。

それぞれにつきまして、文章の中でいろいろ御指摘いただいたところでございますけれども、おおむねこの四つで議論を進めさせていただいたところなので、そのままにしております。

3ページ目から4ページ目にかけては、生活科の特質に応じ、育まれる見方・考え方という部分でございます。3ページ目の真ん中の上から三つ目の段ですね。「このように、身近な人々、社会及び自然を自分との関わりで捉え、比較、分類、関連付け、試行、予測、工夫することなどを通して、自分自身や自分の生活について考えることは、生活科の特質

に依じて育まれる見方・考え方であると言える」という部分、ここの基本の考え方は変えておりません。

若干、言葉の整理をしたり、工夫という部分を後ろに持ってきておりますけれども、試行・予測に比べて、工夫の方が更にその捉えたもの、感じたものを主体的にまたアレンジしていくという部分で、もう一段階思考が深まる場所があるのかなということで、順番を変えたりしております。そういった文言の表記とかを整えているということで、基本的な捉え方はこの辺りは同じものをそのまま入れております。

それから、資料の5ページ目、4ページ目、5ページ目におきましては、生活科で育成する資質・能力ということで、こちらはポンチ絵の資料等も行った来たりしながら御議論いただいていたところがございます。

それから、5ページ目のところからは、教育課程全体における生活科の役割とカリキュラム・マネジメントというところになってまいります。その、済みません、1のところでございますけれども、生活科のこの育成すべき資質・能力の整理のところ、1点、5ページ目の上の段でございますけれども、学びに向かう力、人間性等という柱の中で、意欲と自信を持って生活しようとする態度ということを上げておりました。評価の部分で、学んだり、生活しようとしたりということを入れておりましたけれども、生活という中に、この学ぶという要素も入るのか、あるいは、特出しした方がいいのかということ、若干ちょっと迷うところもありまして、括弧書きで入れるというような形にしております。この辺りも、御意見、御指摘等も頂けたらというふうに思います。

それから、5ページ目の下の段から6ページ目にかけては、スタートカリキュラムの観点、それから、7ページ目には小学校低学年の学習、あるいは、中学年以降の各教科との接続の観点ということを入れております。

7ページ目の一番下に、少し文章を書き加えたところがございます。7ページ目の下から8ページ目にかけて、文章を加えたところがございます。低学年の各教科とのつながり、それから、中学年の各教科とのつながりということ、見方や考え方のつながりということで御説明してまいりましたけれども、この生活科というのが、中学年だけではなくて、高学年、さらに、中学校へ進んだ上でも、特に実際に中学校に進んで、豊かな経験をしている子供というのは、やはり低学年のうちに生活科でみずみずしい意欲的な経験をしているんじゃないかというような御意見があったこと。

あるいは、8ページ目で、少し文章が長くなっておりますけれども、生活科で体験を通

して一体的な学びを行うというものは総合的な学習の時間につながり、また、それが小学校中学年、高学年、中学校、それから、高校までつながっていく中で、後ほど、また総合的な学習の時間の高校における在り方のお話も御議論いただければと思いますけれども、高校段階では、自己の在り方、生き方との関われで統合されていくということで、最初は生活科の中で一体的な学びだったのが、だんだん教科の系統的な学習に分かれ、また、分かれながらも、総合的な学習がそれを束ねていくというような流れを、小学校から中学校、高校に行き、そして、高校の中では、さらにそれを自分の在り方、生き方と書かれて統合するというような、この非常にここまで含めた大きな流れの中で、このまず最初に生活科で一体的な学びをするということに大きな意義があるんじゃないかという御指摘を頂きましたので、少し文章が長くなっておりますけど、加えているところでございます。

それから、学習過程の在り方、評価の在り方につきましては、8ページ、9ページ目、それから、10ページ目からは、大きな3. ということで、資質・能力の育成に向けた教育内容ということで、学習指導要領に示す内容の部分でございます。

1番目のところは、教育内容の構造化というところで、資料の中で、これまで、生活科の中で示しておりました九つの内容項目、あるいは、11の姿・視点ということ、それから、具体的な15の学習対象というものを整理しましたということ。それが、資質・能力の三つの柱とどのように関わっているかということなどにつきまして、御意見を頂きました。

それから、10ページ目の下の部分で書き加えた部分がございますけれども、生活科におきましては、この11の視点とか内容項目とかにつきまして、基本的にいずれも第1学年、第2学年にまたがった2年間で設定をしておりますけれども、もう少し第1学年、第2学年の発達の違いや経験していることの違いを考慮したような示し方を工夫することができないだろうかというような御指摘を受けましたことを踏まえて、文章を加えているところでございます。

それから、12ページ目は、大きな4番目の柱で、学習指導要領の改善充実や教材の充実ということで、1番目に、特別支援教育の充実、個に応じた学習の充実の柱を入れております。こちらの部分におきましては、生活科の学習の中で、何らか学習の上での困難を抱える子供に対しての配慮ということを中心に記述をしておりましたけれども、単に困難さを補うという視点だけではなくて、むしろ、その得意な部分を生かすような指導の工夫というような視点から行うことによりまして、自己肯定感の醸成にもつながるのではないかというような御指摘を頂いたことを増えまして、文章を加えております。

それから、12ページ目から13ページ目にかけては、アクティブ・ラーニングの視点、「深い学び」、「対話的な学び」、「主体的な学び」に向けた学習・指導の改善充実ということとでまとめていった部分につきまして御意見を伺いました。

この中で、13ページ目の「深い学び」の視点のところでございますけれども、いかにこの低学年らしさといいますか、生活科らしさといいますか、そういったところで複数御意見を頂きましたけれども、低学年らしいみずみずしい感性によって子供たちが感じ捉えるということと、それを自分自身の実感が伴った言葉にして表したり、様々な事象と関連付けて捉えようとしたりすることを助けると。そういったような教師の関わりということが求められるのではないかとということで、幼児教育の豊かな体験からつながる部分でのそのみずみずしい感性という部分と、一方で、その教科として生活科が位置付けられているところ、特に教師のどういう関わりが求められるかという形で、こういった一文を加えたというところがあります。この辺りの表し方につきましても是非御意見を頂ければというふうに思います。

それから、13ページ目、14ページ目、15ページ目にかけては幾つか文言を加えておりますけれども、15ページ目、16ページ目につきましては、動物の飼育に関するところで幾つか御指摘がありますので、少し文章を加えているというような修正を行っております。

以上、全体的に、生活科につきましては、大きな構成といいますか、それぞれの表し方、あるいは、こういう点も忘れずに大事にしていきたいというところを中心に御指摘を頂いたものかというふうに思います。この頂いたところの反映の仕方、あるいは、それ以外のところで、またこういう修正が必要ではないかというところなどにつきまして、御指摘を頂ければ幸いです。よろしく願いいたします。

#### 【鹿毛委員】

拝見したところ、今回、思考力とか判断力とかというような辺りがかなり強調されているということに伴って、前回は記録によると出たと思うんですけれども、感じたり考えたりという辺りが両方とも大事であり、また、みずみずしい感性みたいな言葉が出ていますけれども、その感性的なところが、思考として表現する必要があるのではないかなというふうに思っているんですね。と申しますのが、奇しくも、先ほどのプログラミングの方でちょうど話があったとおり、実は、人間ならではの感性ということがプログラミングの方でも実は指摘されています。心理学でも、実は理性、論理に代表される理性的な思考だけではなくて、非意識的な思考といいたいまいしょうか、感性に基づくような直感であるとか、そ

ういうことこそがその全人的な発達の基本としては非常に重要であるということが、テクノロジーとかが発達すればするほど、強調されていると思うんですね。

そういうふう考えたときに、この今、そういう観点から読み直しますと、思考という、思考判断というものが非常にどちらかという論理的な、生活科でも、かつてから、科学的な見方・考え方というふうの一部で強調されていたところが、全面的に広がるような形のように読めてしまうことが個人的には非常に危惧しているところでございます。

とりわけ、生活科の特質に応じて育まれる見方・考え方という案が以前からあるんですけども、その思考に当たる部分が、比較、分類、関連付けから入っていくんですね。これというのは、比較、分類というのはどちらかという理性的な側面でありまして、むしろ、生活科が従来から大事にしてきた、感性的な思考と言ったらちょっと論理矛盾のように聞こえるんですが、実はそのところにまつわる思考をキーワードとして例えば上げるならば、例えば直感であるとか、直感というのは二つ表現があると思いますけれども、感じるの感と観察の観ですよ。例えばそういうような思考であったり、あるいは、創造ですね。

イマジネーションでありますとか、今、予測という言葉がありますけど、それはすごく語感が強くて、どちらかという、サイエンス的なのというか、そちらに偏ったものに対して、例えば推測とか、そういうふうにすると、今までの経験とか感じたものを基に、何かを見通すであるとかというふうな言葉になりますし、あるいは、類推であるとか、その推という字はもともと推し量るという意味がありまして、だから、どちらかという、理性に偏ったものではなくて、ある意味、感性と理性をつなぐような、そういうような働きもあるんじゃないかなというふうに思っております。

ですので、実はこのことは非常に重要だと思っていて、それはなぜかという、その後、評価のところにそれが関わってくるんですね。今の、先の話、じゃないか、まさに今、次のところですね。次の区切ったところでは次なんですけれども、10ページ辺りに、思考力は具体的にというふうには評価観点とか、そういうふうになって、具体的に示すようになっていったときに、実は見方・考え方、生活科の見方・考え方に特出しされている言葉というものが非常にインパクトが強いものですし、今出されているものというのが実は限られた、どちらかという、理性に偏るものばかりが並べられているという印象があるので、それをどう考えたらいいのか。

これをだらだらといろいろなことを並べていって、イマジネーション、それこそいろいろ

ろな多様な思考ということ、感性を含めて提示するのがいいのか、あるいは、何かこういうふうに、今はちょっとこれだけ特出ししてしまうと非常に偏っていると思うので、思考の部分をどれだけ具体的なキーワードとして、この見方・考え方に組み入れるのかというのは結構私は大きな問題だというふうに考えています。

#### 【村川委員】

私は生活科の方に関しては、ほとんど全体的、ほとんど異論はないんですが、ただ、1か所だけ、今の鹿毛先生のところに少し関連するかと思うんですが、同じく、3ページの丸の二つ目ですよね。今も出てきた。具体的な活動や体験を通して捉えた対象について、比較したり、分類したりと書いてあるんですけども、その個々の子供がこの体験を通して捉えた、やっぱりその対象に関わるやっぱり自分なりの思い入れや気づき、そういうものがまずあって、そういうものを比較したり、分類したりという、何かこの比較や分類するそのものですね。

その対象がちょっと具体的じゃないので、何かこの対象というのは何か環境であったり、動物であったりとか、何かそういうイメージが強くなるので、やっぱりそういうものと関わったことによって生まれた、今言った思いや気づき、そういうものがまずあって、それを、今言った比較、分類、関連付けるという、何かちょっとここにもう一文要るかなというふうに思っています。

#### 【小川委員】

いろいろと加わって、また更に分かりやすくなって、いいまとめになったなというふうに思っているんですが、私も総合の方と比較しながら読んできました。もちろん、それぞれの特性があるので、書きぶりは違ってくることもあるのだと思うんですけども、例えばここに、生活科の特質に応じて育まれる見方・考え方と、生活科の特質とはこういうことであるというのとは何となくこう読みながら、特徴であるとか特性がどうかというふうな形で書いてはあるんですけども、総合の場合は、総合的な学習の時間の特質はということで最初にどんどこういうことであるというふうに示されている中で、もう少し何か明確な示し方ができないことはないのではないかなというようにところを一つ感じたことと。

あと、5ページのところに、生活科の、「こうした資質・能力を育むために、生活科の目標としては」というふうにいきなり入っているんですけども、総合の場合は、この前に括弧として、総合的な学習の時間の目標というふうに見出しが付いておりますので、細か

いことなのですが、そういったところも分かりやすいように、何をここで述べているのかというのが分かりやすいように、そういう書きぶりが必要なのかなというふうに思ったりしました。

あと、7ページ以降の低学年、中学年以降の接続といったところなどは非常によく示されていて、これは生活科を担当する教員だけじゃなく、本当に学校全体として読み込んでほしいところだなというふうに思いました。

#### 【中村委員】

5ページの「学びに向かう力」の三つ目のポツ、「(学んだり)」というのを括弧の中に入れるか、特出しをするかというところで、もしこれを入れないと、生活科で育成する資質・能力の知識や技能の基礎にも、思考力・判断力・表現力等の基礎にも、学ぶという言葉が入らなくなるのかなというのがありますので、そうすると、やっぱり先ほど来皆さん、委員の皆様がお話しなさっている生活科の特質、「意欲と自信を持って学び、生活しようとする態度」というところがやっぱりここは落とせないところかなと思うので、私はこれは括弧を取って、「学んだり」にするか、「学び」にするか、そこは御検討いただければ。このワーキングの中でも、これから小中高大、社会人になっても学び続ける、ごめんなさい、幼児教育もそうなのですが、そここのところの「学び」という言葉はやっぱり欠かせないのかなという意見を持ちました。

#### 【服部委員】

本当によく分かるようにまとめていただいて、ありがとうございます。12ページの特別支援教育の充実についても、困難さを補うという視点だけでなく、得意なことを生かすという視点を入れていただきまして、本当に感謝しております。

願わくば、ちょっとここに入れるかどうか、あるいは、入れると分かりにくくなるのではという懸念もあるんですけども、こうした視点というのは、困難は、特別な支援が必要な子だけでなく、一般にみんなに必要なのかなという気がしますので、ちょっとしたその文言で、学習障害、発達障害の子だけじゃないんだよというのがここであまく言えば、そうしていただければと。もし無理でしたら、この単元立てがこういうことになっているので、無理でしたらそれは大丈夫で、入れなくて、ここでは入れなくてもいいと思いますけど。それだけちょっと感じたので。

#### 【村川委員】

1つ筆問です。この論点、議論のまとめは私もこれ、非常によくできているなと思うん

ですが、こちらの方に図がありますよね。この図というのは、公的にまたどっか出ていく図なんですか。

**【小野教育課程課課長補佐】**

失礼します。済みません、十分御説明しなくて、申し訳ありません。この図と、あと、このまとめ案がこれからどうなっていくかということをございますけれども、まず、このワーキングのここまでの議論というのを文章で残すということと、併せて、このやはり図で御議論してきていただいたことを、図の形でも残していきたいと思っております。

一方で、今、各教科、このワーキングごとにこういった議論をしておりますので、添付資料も含めると、恐らく全部単純に足し併せると、すごい厚さになりますので、これを最終的にこの教育課程企画特別部会、あるいは、教育課程部会などで、これ、御審議のまとめ案などにつなげていただくに当たりましては、このエッセンスを概要として入れたものをそれぞれ溶け込ませていただくという形で進んでいくことになろうかと思えます。

ただ、一方で、そちらは恐らくかなりエッセンスになりますので、そこに至るまでどういう議論があったり、どういう整理があったかということ、このワーキングのまとめや、あるいは、それに至るまで御議論いただいてきた、むしろ、恐らくこの図の方がたくさん時間を掛けて御意見いただいてきたところだと思いますので、こちらの方も残していきたいと思っております。

また、そういう意味では、逆に、文章でここにこういう言葉を残すという以外にも、この資料上でこういうところを残すということもまた是非御指摘を頂ければというふうに思います。

**【鹿毛委員】**

この図について、ちょっと気になったところがあるので、今これが外に出ないということであって、最終的にはこの文章になるのであればいいかなと思っていたんですけども、もしそういう外に出る可能性があるとする、この資料2-2なんですけれども、これは、これだけを見ますと、生活科の上に、そのまま社会科と総合的な学習の時間と理科が乗っかるような形になっていて、他教科が全然ほかにすとんと無関係みたいに見えちゃうんですね。

これというのは非常に誤解を生むというか、生活科、文章の中ではそうなくて、むしろ、例えば社会とか理科につながるということは全く触れ、というよりも、むしろ、全教科の課程全てのことにつながっていくというような理解だと思うんですね。

ただ、これだと、これだけ見ちゃいますと、ほかの教科はその土台の部分を共有してないように読めてしまうので、注意が必要かなと思いました。

**【見上主査】**

では、生活の方は、まず一旦一区切りいたしまして、続きまして、「総合的な学習の時間」について議論を行ってまいりたいと思います。総合的な学習の時間のまとめ案につきまして、事務局から説明をお願いいたします。

**【小野教育課程課課長補佐】**

失礼します。お手元資料3に枝番の付いたもの、資料3-1から3-6までが、総合的な学習の時間につきまして、これまで御意見を頂いてきた図表と、資料3-6がそれを文章化したたたき台のイメージ案でございます。

こちら、前回第8回のときに御意見を頂いたものを踏まえまして修正したものを御意見いただければと存じます。

全体に掛かるお話としましては、ボリュームとしましては、生活科よりも総合的な学習の時間の方が、一回り、二回り、少し分厚くなっております。御意見、前回御意見としまして、一個一個の内容というよりは、全体を分かりやすく伝えようとしたときに、非常に若干繰り返しになっている部分とか、関係性が分かりにくい部分があるので、もう少し全体を整理していただけないかというような御指摘を頂いたところでございました。

そういった点も踏まえまして、全体で若干繰り返しになっているところは簡略化したり、あるいは、順番を入れ替えたりして構造を示せるところは工夫したりというようなところなども工夫しておりますけれども、それでもまだまだ大部なところでございますので、こういうふうにしたら整理が分かりやすくなるんじゃないかということなど、是非御指摘を頂けたらと存じます。

資料3-6でございますけれども、生活科同様、1番目には、「これまでの成果と課題」ということを上げております。この中で、2ページ目のところでございますけれども、「課題とさらなる期待」というところでございます。ここが、前回少し文章が非常に長くなってしまっていたところを、生活科と同じように、三つの課題がありますということで構造を整理しています。

一つ目は、総合的な学習の時間で育成する資質・能力についての視点ということです。二つ目としましては、3ページ目に掛かりますけれども、探究のプロセスに関する視点ということで、こちらは学習の過程ということになります。それから、三つ目の論点としま

しては、高等学校における総合的な学習の時間への取組という、全体に大きくこの三つの課題ということで整理できるのではないかということで、書いている内容のストーリーは大きく変わっておりませんが、見方を少し整理するというような形でまとめ直したものでございます。

それから、3ページ目の下以降が大きな2番目の柱としまして、「総合的な学習の時間において育成する資質・能力の柱について」でございます。3ページ目の下の(1)のところから4ページ目にかけては、総合的な学習の時間の特質に応じて育まれる見方・考え方についてということで上げております。

ここも前回の御指摘等を踏まえまして修正を加えておりますが、総合的な学習の時間の見方・考え方につきましては大きく二つの視点がございまして、4ページ目で参りますと、最初の丸のところ、「横断的・総合的な学習は」というところは、総合的な学習の時間の固有というよりは、各教科等で学んだもの、身に付けたものということを経合していく、統合していくというところの横軸的な視点を中心に上げているところでございますが、総合的な学習の時間の見方・考え方は、単に各教科で学んだものを使うということだけではなくて、総合的な学習の時間特有の特質を踏まえて育まれる見方・考え方があるのではないかという部分が、同じ4ページ目の中でも、二つ目の丸の部分と三つ目の丸の部分でございます。ここところが少し説明が、もう少し説明を加えた方がいいかなというところで、説明を丁寧に加えているところでございます。

4ページ目の二つ目の柱のところは、前回も俯瞰的に捉えるということを見方・考え方のキーワードとして上げておりました。そこを少し丁寧に書き下すような形で、「各教科等の『見方・考え方』を活用しながら、多様な他者と協働し、異なる意見や他者の考えを受け入れたりする中で、実社会や実生活との関わりで見出される課題を多面的・多角的に俯瞰して捉え、考えること」、それによりまして、見方・考え方は多様な文脈でも使えるようになるなどして確かになっていくというようなこと、その「俯瞰的」という趣旨を少し書き下すような形で加えております。

それから、同じく4ページ目の三つ目の丸のところは、これは内省的という言葉で表していた部分を、更に少し丁寧に書き加えてみたところでもあります。この内省的というキーワードは、実はちょっと中で事務局でこれを作るときもいろいろ議論がございまして、言葉の元の言葉で言えば、リフレクティブとかリフレクティブネスというような言葉が恐らく当たるのかなと思いますけれども、和訳するときに、内省的というと、どうしても何か

内にこもるような印象があるんじゃないかというような中での議論の中でありました。

ただ、言葉としてはやはりこれが適切かなと申しますのは、やはりこと総合的な学習の時間におきましては、いろいろ体験をする、そこで感じたものがあるということをいかにつなぎ止めるといいますか、自分自身のものにしていくかということをしかり打ち出していくことが必要ではないかということが今回全体を通した大きな課題として上げられるのかなと思います。

内省的という言葉が少し語感的なものがあるところは、説明を丁寧に加えて、赤字で入れている部分ではありますけれども、内省的に考えるということは、それはいろいろな変化に対応したり、経験から学ぶということ、物事を自動的に受け止めるのではなくて、吟味して見定めたりする。批判的といいますか、クリティカルシンキングといいますか、こういった視点から行動に結び付ける力というような考え方ができるんじゃないかと。

こういう形で、この内省的という言葉を使っているものとしまして、OECDが示してきたキーコンピテンシー、三つ大きくございますけど、その真ん中に、この内省的なもの、リフレクティブネスというものがあるんじゃないかということが言われているところでもあります。こういった趣旨を少し書き加えることによりまして、この見方・考え方における内省的な意味、内省的というものを意味を加えたところがございます。

この辺り、これで果たしてその伝えたい表したいことが伝え切れているかどうかという辺り、是非御意見を頂ければというふうに思います。

それから、5ページ目は、緑線でたくさん見え消しになっておりますけれども、若干文章の順番、構造が分かりにくいということで、ここは少し短くして、9ページ目に移動するという形で削除したところでございます。

6ページ目からが、総合的な学習の時間の中で育成する資質・能力ということで、三つの柱に沿って、それぞれその考え方をまとめたところが6ページ目から7ページ目、それから、8ページ目にかけてでございます。若干の文章修正をしておりますけれども、基本的な元の形のままになっております。

この資質・能力の柱の整理を踏まえた総合的な学習の時間の目標の示し方のイメージというところが8ページ目以降のところがございます。この部分は、これも文章全体の重複感、分かりにくさと重なるところがございますけれども、他方で、見方・考え方というものがあって、それから、学習の目標について、柱書きと1、2、3と具体的に書いているところがあって、また、学習のプロセスが後半、示されているところがあってと。どうして

も、同じ表現がいろいろ出てきてしまうところもあるので、その趣旨を生かしながらも、できるだけすっきり示せないかという形で整理したところがこの8ページの目標の部分でございます。

少し見え消しがくどくなって読みにくくなっているところがあるかもしれませんが、高等学校につきましては、総合的な学習の時間の特質に応じて育まれる見方・考え方というのを端的に表すと、探究の見方・考え方というふうには言えるのではないかということで、探究の見方・考え方を働かせ、よりよく課題を解決し、自己の在り方生き方を考えることを通して、次のとおり、資質・能力を育成するとしまして、三つの柱に沿ったものを上げるという形に上げております。それぞれ三つの柱に、何々を通してということで、若干繰り返しになってしまうところは省くような形で整理をし直しております。

8ページ目の一番下から9ページ目にかけて、同じく小・中学校の目標の書き方のイメージにつきましても整理をしました。こちら、総合的な学習の時間の特質に応じて育まれる見方・考え方というふうにしたところを、ここも端的に表せば、探究的な見方・考え方ということが言えるのではないかということで、「探究的な見方・考え方を働かせ、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えることを通して、次のとおり、資質・能力を育成する」としまして、三つの柱に沿ったものを上げているというような書き方にしているところでございます。

この辺りは、見方・考え方にどこまで書くか、それから、この目標の書き方の部分に書くかというところで伝え方がいろいろあるところかと思しますので、この辺りの書きぶりの工夫なども是非御意見をまた改めて頂けたらというふう存じます。

それから、9ページ目で、緑字にしているところは、もともと前の部分に書いていたところをこちらに動かしてまいりました。総合的な学習の時間の目標の表し方としまして、ほかの教科等と一番違うところとしまして、学習指導要領に示している目標は「第1の目標」という言い方をしておりますけれども、各学校においては、この「第1の目標」、学習指導要領において示されているものを踏まえた上で、それぞれの学校の総合的な学習の時間の目標、それから、内容を定めるという構造になっているということをここで上げております。

これを前に上げておきますと、行ったり来たりする感がありますので、あえて後ろに持ってくるという形で整理をし直しまして、また、この「第1の目標」を踏まえて、各学校が設定する目標につきましても、三つの柱の考え方を踏まえ、また、地域、学校、児童生

徒の実態に基づき目標を定めることが求められるというようなまとめ方で、今まで述べていたことを少しまとめるような形で上げているところがございます。

それから、9ページ目の下の2のところは、総合的な学習の時間の教育課程全体における役割、それから、カリキュラム・マネジメントの中で果たす役割ということで入れているところがございます。

10ページ目の下の段のところ、幾つか書き加えたところがございます。もともと書いていたところではありますが、よりもう少し趣旨をはっきりすることができないかということを書き加えたところがあります。

総合的な学習の時間がこのカリキュラム全体の中で果たす意義としまして、同じ10ページ目の二つ目の丸では、教科横断的な学びを行うという意味で、その横というような軸、それから、その一つ下の二つ目のところでは、学年間、学校段階間での縦のつながりというものにおいても総合的な学習の時間が果たす役割が大きいということを上げておりました。

それから、「さらに」で上げていた部分、ここを少し言葉を書き加えておりますけれども、総合的な学習の時間の目標につきましては、各学校が育てたいと願う児童生徒の姿や育成すべき資質・能力を表現するということになりますので、これはいわば学校の教育目標そのものに直接つながるということで、他の教科等の目標にはない特質を有するということがあるということで、その特質を改めて明示するような形で書き加えたところがあります。

こういった各学校の目標に直結するという意味から、学校の教育目標を、教育課程で具体的、具体化していくに当たって、総合的な学習の時間が果たす役割は大きいのではないかと改めて書き加えたところがございます。

また、高等学校においては、特に多様性というものがございますので、総合的な学習の時間でどのような資質・能力の育成を目指すかということが、いわばその学校のミッションを体現するということを入れておりました。

更に書き加えまして、小・中学校におきましてでもございますけれども、小・中学校でも、これまで様々な取組ということが行われてきておりますけれども、ただ、この10年、20年、実践を重ねてくる中で、その積み重ねを、もう一度、総合的な学習の時間の取組につきまして、学校教育全体の目標で育成したいと願う児童生徒の姿、育成すべき資質・能力の視点から評価し直して、更なる改善につなげていくと。このカリキュラム・マネジメ

ントのPDCAのCAの部分をもう一度強調すべきじゃないかというような御意見もありましたので、こういった文章も加えているところでございます。

それから、10ページ目の一番下の段から11ページ目にかける、12ページ目にかけては、資質・能力を育む学習過程の在り方ということで、ここは幾つか文言の整理で文章の表記を分かりやすくするというような修正を行っているところであります。

12ページ目のこの章の最後のところの「なお」のところでありまして、この探究のプロセスにつきましては、ポンチ絵で御議論いただいたときにも再三御意見いただきましたけれども、必ずしもこの順序であるわけではないと。順序性が決まっているものではないということは特に強調すべきというところ、たびたび御指摘、御意見を頂いてきたところでありまして、それにも関連しまして、特にこの探究のプロセスを意識したときに、ときには失敗をする、あるいは、立ち止まって前提を疑って、場合によっては戻ってみる、考え直してみるということがあってこそその探究的な学びなのではないかということで、このプロセスというものと、そのプロセスを行かないことにも意義があると、非常に大きな意義があるということに改めて書き加えるというような修正を加えたところでございます。

また、12ページ目から13ページ目にかけては、評価の観点のあり方ということで、ここも目標の書き方全てを修正をするという形で直しているところでございます。

それから、14ページ目の下の段のところから大きな3番目の柱としまして、「資質・能力の育成に向けた教育内容の改善、充実」というところでございます。このうちの(1)のところは、「探究」の意義からの領域構成の見直しというところで、他の教科であれば、小中高を通じた教科構成の見直しというところでございますけれども、ここは総合的な学習の時間という領域の構成というのをこの「探究」の意義からどう見直すかということで、前回は御意見いただいたところでございます。

14ページ目から15ページ目にかけては、小学校、中学校における意義、それから、高校における意義ということで、特に高校のところを強調してきたところでございます。この高校につきましては、その総合的な学習の時間の在り方につきまして、より探究的な学びであるということ意識する、強調するために、その名称についても見直すべきであるというような大きな見直しの方向性を出しているところでありますけれども、一方で、下の15ページ目の丸を加えておりますけれども、大きなこの見直しに踏み込むべきであるということの一方で、その改革、新しい取組を進めていくに当たりましては、小・中学校の

総合的な学習の時間、これまで育んできたことを生かすということも当然重要でありますし、また、高等学校の中におきましても、探究的な学習の実践の積み重ねというのが生まれつつあるというものもございます。

また、専門学科における実践的な学習ですとか、スーパーサイエンスハイスクールやスーパーグローバルハイスクールにおける取組といった事例、それから、国際バカロレアのディプロマプログラムにおける「知の技能」(Theory of Knowledge) といったものの取組、あるいは、学ぶ内容なども参考にしながら、どのような進路に進もうとも、生涯にわたり学び続け、探究し続けていくことの意義を理解する、そのために必要な力を付ける時間とするよう各学校における取組の一層の充実が期待されるということで、もう一段、この意義をはっきりと示す。また、これまでやってきたこともしっかり生かすということを加えるということで、1文加えたところでございます。

それから、16ページ目は、この同じ柱の(2) としまして、資質・能力の整理と学習過程の在り方を踏まえた教育内容の構造化という部分でございます。総合的な学習の時間におきましては系統的に内容を示すという教科等ではございませんので、主にこの学習活動の設定に関する示し方をどうするかということを中心にご意見を頂いてきたところでございました。

頂いた御意見等を踏まえまして、幾つか加えているところがございますけれども、16ページの三つ目の丸の中にぶら下げております黒丸の一つ目のところでございますが、学習活動の例示についての考え方を示すという中で、特に御意見を頂いたところは、地域社会における課題を扱う、その課題に対する解決を扱うということを強調すべきであるということ、それから、その目標の取り上げ方につきましては、実際に地域にあるかどうかということも含めてではありますけれども、児童生徒にとって身近に感じられるようなテーマを取り扱うということもこの学びを深めるものにつながっていくのではないかと。あるいは、それを学ぶことによって、探究的に学ぶことの意義や価値、そういったことが実感しやすいような課題を設定するということが考えられるのではないかとということで、幾つか具体的に書き加えるというような修正をしているところでございます。

また、こういう学習活動の例示をすることを踏まえまして、(1)、(2)、(3) では、それぞれ知識・技能、思考・判断・表現、それから、学びに向かう力、人間性等に関しましても、ここもまだ具体的にどういう示し方ができるかというところは今後検討が必要などころではあるかとは思いますが、知識・技能については、その学習対象を学ぶことを

通じて獲得されるような概念的な知識、これについての方向性を例示するということを検討するということ。思考力・判断力・表現力につきましては、探究のプロセスを通じて働く学習方法に関する資質・能力、これの例示ができないかということを検討してみたいと、どういう示し方ができるかを考えてみたいということを上げているところでございます。

それから、17ページ目には、同じ柱の(3)ということで、現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直しということを加えてございます、入れております。ここは元から文章を入れておりましたけれども、もともとは総則の見直しを踏まえた総合的な学習の時間でも必要な規定を置くという、まだ少し漠としたものを入れておりますけれども、大きく二つの視点を書き加えております。

一つは、これは本来は総合的な学習の時間というよりは、論点整理の中でも触れられておりますように、今回、全般、各教科全体に関わる話ではございますけれども、特に総合的な学習の時間と関わりが深いと考えられる持続可能な開発のための教育、ESDの視点ということで書き加えております。

若干少し説明的な部分も入れてありますので、丸としましては五つの丸になっておりますけれども、我が国が提唱しUNESCOを中心としまして取り組んできたこの持続可能な開発のための教育、ESDにつきましては、教育課程全体の中で育成すべき資質・能力の根底にあるというようなものであるというふうに言えると思います。

具体的に、こういう内容の学習をすることがESDであるということではなくて、持続可能な開発の担い手を育むために、地球規模の課題を自分のこととして捉え、その解決に向けて自分で考え、行動を起こす力を身に付ける、そういったいわば資質・能力を育むための教育ということで、ESDは示されてきたというものがございます。

このESDでは、じゃあ、どういう資質・能力を育むのかということにつきまして、これは一つの整理でございますけれども、国立政策研究所がまとめたものとして、この持続可能な開発の担い手を育むということに掛かる資質・能力として、六つ挙げております。「持続可能な社会づくりの構成概念」、それから、「多様性」、「相互性」、「有限性」、「公平性」、「連携性」、「責任性」、こういったような六つの概念、こういったものの理解を深めるということ、これを基本的な構成概念の例というふうに挙げております。

これはESDで例示として挙げているところではありますけれども、先ほどの総合的な学習の時間の学習の示し方の中で、この概念的な理解の例ということを示せないかということを上げていますけれども、このESDで整理されているこの概念的なものの理解という

ものもまたその参考になるのかなという意味も含めまして、ここは少し具体的に紹介させていただきます。

それから、18ページ目の最初のところですが、**「ESDの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」**ということで、これも国立教育政策研究所が整理したものであります。批判的に考える力、未来像を予測して計画を立てる力、多面的・総合的に考える力、コミュニケーションを行う力、他者と協力する力、つながりを尊重する態度、進んで参加する態度といったものが例示されているところであります。

これも総合的な学習に限らず、非常に教科横断的に関わってくるところではありますが、総合的な学習の時間の中で探究的に学習する過程の中で、こうした力を実際に働かせ、その力をより確かなものにしていくというようなことにつながっていくことが考えられるのではないかとということで、ここも具体的に紹介させていただきます。

こうしたような資質・能力を育成するためには、例えばどのようなテーマを設定するか、このテーマを設定することが大事であるというよりは、この持続可能な社会づくりのための構成概念の獲得、あるいは、資質・能力を育むということを意識した学習を展開することが重要なのではないかとということで、各学校がESDのこうした視点ということを、視点から学習を充実させていくに当たりまして、総合的な学習の時間が中心的な役割を果たすということが期待できるのではないかとというようなことを入れているところでございます。

それから、もう一つ大きく書き加えたところとしまして、先ほど、協力有識者会議の方で検討いただいております情報活用能力、プログラミングの視点でございます。情報活用能力に関しましては、総則・評価特別部会の方で、教育課程全体を通じまして、情報教育活用能力の育成というものの充実を図っていくということが示されたところであります。それに加えまして、このプログラミングに関する会議の中で御意見いただいて、先ほど大杉室長から御説明したところの中で、総合的な学習の時間に絡んで入ってきたところをほぼ、少し言葉を書き加えながら入れたところがその内容でございます。

プログラミングに対して、小学校段階から体験し、その意義を理解するということが求められており、教育課程全体を通じて、各教科ごとの特質に応じた取組ということを小学校段階では期待されるということがあります。

その中で、総合的な学習の時間においてはということでございますけれども、情報に関する課題について探究的に学ぶ中で、自分の暮らしとプログラミングとの関係を考え、プ

プログラミングを体験しながらその良さに気付く学びを取り入れていくということが考えられるのではないかとということで、例えばでありますけれども、プログラミングを体験しながら、生活を便利にしている様々なソフトウェアというものだけではなくて、目に見えない部分で様々な製品、あるいは、社会のシステムなどにおいて、プログラミングというものが機能して働いているものがあるということを体験的に理解するというようなことは、総合的な学習の時間の学びとして考えられるのではないかとことを上げております。

プログラミング教育につきましては、ここもいわば留意点的に入れていっているところではございますけれども、プログラミング的思考など、子供たちが将来どういう職業に就くにしても、普遍的に求められる力を育むということが目的でありまして、プログラミング言語を用いたコーディングを覚えることが目的ではありませんし、また、プログラミングを体験することが総合的な学習の時間における学びの本質である探究的な学習として適切に位置付けられるようにするというようなことが必要であるということをごをここで書き加えさせていただきます。

それから、19ページ目からは、4ポツの柱、「学習・指導の改善充実や教材の充実」という環境整備面の関わってるところでございます。ここも1番目に特別支援教育の充実の視点を入れておりますけれども、ここももともとたしか生活科の方で御指摘を頂いたところでありましたけれども、総合的な学習の時間にも大いに関わるだろうということで、困難さを捕うという視点だけでなく、むしろ得意なことを生かすという視点をこちらにも加えているところでございます。

それから、20ページ目以降、「深い学び」、「対話的な学び」、「主体的な学び」というアクティブ・ラーニングの視点の学習指導改善の充実というものが20ページ目、21ページ目、それから、22ページ目にかけて入れております。ここは幾つかの文言の整理、あるいは、後半の部分ですので、前半で述べた部分と重なる部分は文言を整理するというような修正を加えているところであります。

それから、22ページ、(3)のところでは、教材のあり方ということで、より探究的な学習を展開するための教材の作成というところで、高校のより探究な在り方に変えていくというところの部分で入れております。ここも特段御意見いただけていないので、そのままになっておりますけれども、ここもまた具体的なアイデア等を頂けましたら、加えさせていただきますというふうに思います。

5番目の「必要な条件整備について」というところで、各学校における体制のところ、

ミドルリーダー的な教員の大事さというところを入れておりますけれども、そこについて御指摘があったことを少し文言として書き加えているところであります。

それから、24ページ目におきまして、各地域における推進体制や研修等ということで、ここで少しこういう総合的な学習の時間の趣旨を踏まえて、各教員には、どういう資質・能力を向上させることが望まれるのかということで、赤い丸で一つ加えております。育成すべき資質・能力を意識して、探究的な学習の過程をデザインしたり、指導性という部分と児童生徒の主体性・自発性という部分、この二つのバランスをどう取りながら関わって、児童生徒の成長を引き出すことのできる力というのが求められるのではないかと。よくファシリテーション力ということを言われたりする部分もありますけれども、そういったところとも関わる場所なのかなということで、一文加えております。

また、こういう教員の資質向上を図るための国や都道府県のレベルの取組が非常に重要であるということも前回も御指摘いただいたところでありました。また、具体的に、ジョブシャドウイングというような具体的なアイデアもありましたけれども、やはり総合的な学習の時間を充実するために必要となる教員の資質・能力というのは、知識の伝達により向上させるというよりも、とにかくより実践的な学びということを通じて高めていくことが必要なんじゃないかということで一文を加えているところであります。

また、学習環境の整備、それから、地域との連携だけでなく、保護者・家庭との連携ということも非常に重要であろうということで、保護者・家庭との連携ということで一文加えております。

ここは少し高校ということも意識して文章を加えております。高等学校では、総合的な学習の時間が必ずしも期待されるような役割を果たし切れていないということを課題のところでも上げておりますけれども、その背景としまして、よく言われることとしましては、受験指導を重視しがちであると。なぜその受験指導を重視しがちかということ、保護者や生徒がそれを望んでいるからだというようなことをよく言われてきたところがございます。

しかし、総合的な学習の時間が導入された当初の高等学校におきましてはそういったところも多かったということはあるかもしれませんが、保護者自身にもそうした学習の経験がないということで、なかなか趣旨が伝わっていなかったのかなというところはありますけれども、現在では、多くの保護者に総合的な学習の時間の重要性というのは捉えられているという、調査等の結果でも、そういったところが出てきているところもありますし、また、子供、これからの高校生というのは、小学校、中学校でこの総合的な学習の時間の

充実が図られてきているというものをまさに経験した子供たちが高校に入ってきているということもありますので、そういった中で、改めて社会に開かれた教育課程の視点から、学校と保護者が育成したい子供たちの資質・能力について共有し、必要な協力を求めていくことができるような状況になっていますし、そういったことが大事なんではないかということを加えたところであります。

また、最後、25ページ目は地域の連携というところで三つほど文章を加えていっているところであります。ここも前回の御意見を踏まえて入れております。児童生徒にとっても、地域の特質に応じた課題を学ぶことに意義がありますし、地域においても、児童生徒がそういう学びをするということは非常に大きな意義があるということがあるということ。

それから、コミュニティ・スクール、学校運営協議会を設置するという枠組みにつきましては、この開かれた社会、社会に開かれた教育課程の理念を実際に具現化する仕組みとして積極的な活用が望まれるのではないかとということ。

それから、首長部局との連携ということにつきましては、是非、総合的な学習の時間でも強調すべきであるという御意見を踏まえまして、最後、書き加えたところでございます。

以上、修正内容は多岐にわたりますし、また、全体を分かりやすくというところをどれだけこれで迫れたかというところがございますけれども、また忌憚なく御意見を頂ければと存じます。よろしく願いいたします。

**【見上主査】**

ありがとうございました。それでは御意見頂戴できればと思います。

**【久野委員】**

3点に課題をまとめていただいて、非常にすっきりしたものになっているなと思います。

やはり、3点目の高校が一つはやはり一つ重要な鍵を握っているだろうというふうに考えておりまして、その中で、三つ目、今の記述でいきますと、三つ目は、高等学校における総合的な学習の時間への取組という視点であるということで、ここの表題のところ少し、何というんですかね、方向性に欠けるといえるか、それを更なる充実をするんだ、つまり、逆に言えば、充実がまだもう一段、是非高めたいというという期待を込める必要があるのではないかと。取組という視点だけでは、少し方向性が見えないなと感じました。

**【鹿毛委員】**

先ほどお尋ねもあった内省ということに関連してなんですけれども、今の課題と方向性というところにも実は関連することだと思うんですが、今まで、先ほど主査の方からもお

話があった、総合でいきなり課題の設定というところが入る。要するに、Plan Do Seeみたいなことをマネジメントしていく、そういう、自己調整学習というんですけれども、それを乗り越えるところにこそ、今回、方向性があるんじゃないかと思うんですね。

それはどういうところかいうと、まさにOECDが指摘するキーコンピテンシーの三つの背景、余り語られないんですが、そこにリフレキティビティとかリフレクションということが言われていまして、それは内省というふうに訳してしまうと、内省というのは一般には自分自身に対する反省を意味しますから、いわゆるリフレクションというのは精察というふうに訳されるんですね。反省的思考というところから出てきている考え方なんですけれども。そういうふうに考えると、そこは思慮深さであるとか、熟考であるとか、立ち止まって振り返って今後を見通していくような思考のことを指しているわけですね。

そうすると、その問題解決プロセスそれ自体も見直すということも含まれているわけですから、そこら辺が今までの課題の設定、収集、分析、まとめ、表現という、それがそのまま単元化されて、その順番をステップ化してやっていけば、そういう力が付くかということ、そうではないところの、今回もし強調するとするならば、その背景にあるそのようなリフレクションのことを重視するというのを打ち出さない限り、何ていうんでしょうか、同じように見えてしまうのではないかなというふうに強く思うんですね。

ですので、もっと言っちゃうと、問うことそれ自体を、探究のやっぱり本質というのは問うことだと思うんですけれども、その問うといことを学ぶというか、学問そのものだと思うんですが、問うといことを学ぶといこと、そういう態度を身に付けるといことがないと、例えば問題解決としては、自分の問い自体も見直すとか、そういうことが途中に入らない限り、深い学びには至らないわけです。

ですから、深い学びというキーワードと照らし合わせたときに、やはりもうちょっと力点を、その内省というところがかなり特出しされていますので、ここを丁寧に、実はもっと重視するといか、そもそもの土台のところを時間を掛けてやるとか、ああでもない、こうでもないというふうに協働的に学ぶだとか、そういうような学習プロセスが埋め込まれた単元といことを構想していかない限り、なかなか変わらないというふうに思ったといことです。

#### 【村川委員】

2点あります。まずは、8ページの目標と13ページの評価の観点に関わることなんですけど、8ページの方で申し上げますと、これは高等学校も小・中学校も共通の点なんですけど、1の

「課題に関する概念的知識を獲得し、課題の解決に必要な知識や技能を身に付け」、うんぬんというこの目標が当然評価の観点にはなるんですけども、私もこれまでの会議で述べてきたように、実際、総合的な学習で子供たちが環境なり、福祉なり、あるいは、防災なり、取り組んでいった場合に、多分、教科で学ぶ以上に、子供たちは深く、その課題について本当に概念的な知識を持つと思うんですね。

でも、それは結果として持つんであって、初めからこのように目標や評価の観点にしちゃうと、ともすれば、それが目的化してしまって、いわゆる従来型の、何と申しますかね、習得型の学びに陥ってしまって、いや、探究的な学びをしているから、子供たちは自分の言葉で、それこそ難解な概念も理解し、そして、それもやっぱり人に伝達することによって、自分のものになっていくという、結果としての知識や技能なので、何かもうちょっと書き方を変えないと、これがどうもやっぱり総合の本質を変えてしまうような、そういう心配があるので、ちょっとここは配慮していただきたいなど。

せっかくこの課題や探究することを通してということがあると、まだ、これがこういうことをするからこういうものが獲得されて、こんな技能が身に付くったというのが分かるんだけど、消したことによって逆に困ったことにならないかなというのが、これが1点目です。

2点目は、振り返りに関してはもうプロセスで五つ目に入れてほしいということは2回言ったんだけど、駄目みたいなので、これは取り下げるしかないかなと思っていますが、ただ、やはりもう最後一言言わせていただくと、たくさんさんの総合学習を見てきて、やはり単元の中にきちっと、2時間なり3時間なり、やっぱり自分がこの課題について取り組んできて、それこそ、今回で言われている育成すべき資質・能力の三つの柱で見たときに、例えばこの防災に関して自分はどういうことがやっぱり学んだのか、今のことにもつながりますけど、あるいは、どういう学びをしたから、こういうような問題解決ができたのか、二つ目ですよ。最後に、今回こういうテーマで、半年間、1年間学習したことによって、例えば高齢者に対する、あるいは、障害者に対する自分の考え方、あるいは、今後の生き方がどうなったかと。こういうのはやっぱり2時間、3時間掛けてきちっと振り返ることが、やっぱり僕はずっと見てきて、それはやっぱり大事だなという気持ちは変わらないけども、いろんなところに散りばめてはいただいているので、一言それだけ言わせていただいて、もうしゃあないかなと。

【恩田委員】

まさに4ページ、内省的という言葉を見まして、私はすごく感銘を受けました。といいますのは、いわゆる教員の総合的な学習のマネジメントで、本校では、まさに精察的、つまり、探究的精察ができたかどうかというのが一つ大きな振り返りにしています。いわゆるダブルループ学習だったかどうかということです。既存の枠組みだけで、いわゆるありていな既存のツールの学習じゃなくて、新たな枠組みに挑戦できたかどうかということを使っていて言葉だったので、それを生徒に向けて内省という言葉が使われたということは、これは振り返りを重視するというふうに私は受け止めました。この振り返りが、個人ではなくて、いわゆる生徒が主体的に協働的なグループの中で内省的な振り返りができたら、なおいいんじゃないかなと思って受け止めた次第です。

それから、8ページに、高等学校の3なんですけれども、これはキャリアの視点だと思っておりますけれども、要は、これ、後の上の学びに向かう力、人間性等にも関連するんですけれども、これ、探究したことをどうすれば役立てられるかであるとか、要は、よりよい人生を送る、それから、世界と関わると、まさにその手前にあることだと思っておりますけれども、探究したことをどう工夫すれば、どう役立つのかという、いわゆるHowで終わらずに、Whatであるとか、For Whatにつなぐ、そういうイントロダクションに戻ることが何か表現できないかなと思いつつながら、読ませていただきました。

それから、10ページの二つ目の丸の、その横だけじゃなくて縦のつながりということは、まさしくこれも総合的で探究的な時間を生徒が主体的に協働的にやるという前提に立てば、いわゆるその縦の学年間のいわゆるその批評であったりとか、それから、引き継ぎであったりとか、更に自分の学校の総合を良くしていこうというような、それこそ運営自体に生徒が主体的に関わるのが探究的な総合の時間ではないかなというふうにして見ました。

これは小学校、中学校でも、いわゆる中間発表であるとか最終の発表を、学年を超えて評価し合うというような活動自体、すごく大事なことだと思いますので、縦を、そのような学校内の、学年間で理解していただくことが必要んじゃないかなというふうに思っております。

14ページまでということでしたので、その3点だけ、述べさせていただきました。ありがとうございます。

#### 【小林委員】

ありがとうございます。1点だけなんですけど、10ページのところで、総合的な学習の時

間の目標について、学校の教育目標と直接的につながるんだと、それが他の教科にはない特質を有するというので、総合的な学習の時間が教育課程全体の中で重要な役割を果たすと。これを明記したことの意義が大変大きいなというふうに思っています。

今、校長会等でも、学力向上や教育課程の改善について議論することが多いのですけれども、なかなか総合的な学習の時間の話が後回しになりがちの中で、このことが非常に大きいなと思われまして、それが社会に開かれた教育課程と結び付けられて表現されていることや、それから、上のところで、白丸三つ目でしょうか。下の赤で、社会や、「地域・社会と共有していくことが大きな意義を持つと考えられる」と、この辺が一番最後に出てくるコミュニティ・スクールとの関連の中で、大きな意味を持ってくるかなと思って、好意的に受け止めました。

#### 【久野委員】

ありがとうございます。先ほど、村川委員もおっしゃられたんですけども、やはり目標のところ、ここは極めて大事ななと思って集中して見ております。

見え消し版で8ページ、それから、溶け込み版、こういう表現があるんですね、溶け込み版で7ページ、ちょっと比べながら見てみたいなというふうに思っています。

非常に重複を整理するという意味では、非常に洗練されてきてはいると思うんですが、やはりそれを通してそぎ落とし過ぎると、やはり総合的な学習の時間の本質が少し違った方向に行きかねないというふうに思っています。

具体的に申し上げますと、特に1、2、3のところ、その溶け込み版の方の1を、高校の1を見ますと、「やはり課題（学習対象）に関する概念的知識を獲得し」と、やはり、何ていうんですかね、裸で出てくると言ったらいいんですかね。前段なく出てくると、やはりこれはかなりインパクトの強いものになるように思います。

見え消し版を見ていると文字面が残るので、私たち、感覚的にはあるように透けて見えるんですけども、それがなくて、溶け込み版で見ると、非常にインパクトが強ク見えます。

例えばこの1、2、3それぞれに、冒頭の句は、例えば見え消し版であるように、課題を探究することを通してということを残し、2の方は今生きていますので、「実社会や実生活の中から問いを見出し」、これは探究に近い考え方ですので、そこはよいとして、3番目のところも、「主体的・協同的に課題を探究し」というふうに出てきます。

やはり、これ、1番目のところ、非常にちょっとここは議論がいざ出ると、非常に難し

さに直面するかなというふうに思いますので、ちょっと重複はあるかもしれませんが、探究という言葉はやはり各1、2、3にはやはり残すということが、繰り返し表現するということが総合の探究の道を踏み外さない大事な要素かなというふうに思いました。

#### 【服部委員】

済みません、どこかに書いてあるかもしれないんですけど、1点だけ質問なんですけれども、10ページ、総合が、総合的な学習の時間の目標の中に、学校、各学校が育てたいと願う児童生徒の姿や育成すべき、要するに、学校の目標を体現する、実現するものであるということが書いてあるんですけども、これはあれですよ、学校としてやっぱり教員同士が連携しながら取り組むということがどこかに書いてあるかなと思って探したら、ちょっと見当たらなかったの。あるいは、学校が設定した教育目標に沿ってであれば、個人プレーでもオーケーみたいな余地を残してあるのか。ちょっとそこだけ確認したくて。もしないであれば、連携して取り組むというのがどこかに分かるように入れておいた方がいいのかなと。多分あるんじゃないかと思うんですけども。

#### 【南郷委員】

4ページで、先ほど来上がっていた内省的、探究的省察などのところなんですけれども、たしかのDeSeCoキーコンピテンシーの基になったレポートの中の日本語訳が思慮深さという言葉、鹿毛先生がお使いになった思慮深さという言葉を使っていたかなと思って、これについては、非常に重要な言葉だなというふうに認識をしております。

内省的という言葉、これは本当に熟慮跡が見える文章で、本当に御苦労されたんだなというふうに感じて感銘を受けていますけれど、やっぱりちょっと内面にこもるという印象は拭い難い部分はあるのかなと。今まで先生方、御指摘いただいたところにも共感をしました。

これ、ものの見方、考え方のところにも内省的という言葉が入ってくるので、結構影響が大きい言葉なのかなと思うので、総合の役割ということを教育課程全体の中での位置付けや役割ということを考えると、もう少し外に開かれていく、実社会、実生活に開かれていくような印象を受けるような言葉にした方が誤解が、恐らく事務局の皆様もお伝えにならねたいことを伝える上で誤解がないのかななんて思いながら、拝見をいたしました。具体的な代案がなくて申し訳ないんですが。

関連して申し上げれば、この見方・考え方のところが今、内省的に考えることという結びで終わっているんですけども、これ、非常に私、今、悩みながら拝見していたんです

けれど、やっぱりここにもうちょっと、実社会、実生活に向かっていく行動する姿勢というか、その要素を入れられないんだろうかと思いつつ、ちょっと考えていました。

見方・考え方ですので、脳内の思考ですので、そういう態度面というか、を入れるのはちょっと違うのかなとも思いつつ、各教科等の見方・考え方を見ると、やっぱり国語は表現、理解することを通して、自分の思いや考えを形成して深める。社会科は、例えば概念的枠組みに着目して、課題を見出して解決へ向け、多様な概念を関連付ける。こういう力を発揮して、まさに課題を解決しようというのが総合的な学習の時間の位置付け、役割でありますので、やっぱり各教科は、何ていうんでしょう、やっぱり思考的なものが見方・考え方で重視されているんですけど、総合はもう一歩進んだ態度面、行動していくというか、より高次の課題に取り組もうとする態度とか、よりよい社会の実現に努めようとする態度とかの部分で何かここに入れられないのかなと、悩みながら思いました。

づらづら申し訳ありません。関連でもう一つ。そういう意味では、学習のプロセス、11ページのところで課題の設定の場面や情報の収集場面などなどについて、11ページの二つ目の丸のところで書いていらっしゃるんですけど、既に今も高等学校における総合学習、中学校における総合学習を含め、このプロセスを踏まえた上で、ダイナミックな実社会での実践も行っている取組は非常に多くあるかと思えます。そういう実践を、実社会、実生活での実践を行っていくんだという要素を何か表現できないかなと。このプロセスのどこかで、まとめ、表現を何か実社会での実践ということでやってみることもあれば、あるいは、情報の収集という形で実践をすとか、まさにこのスパイラルでくるくる回すんだと思えますけれども、それをどこかに入れられないかなというふうに思いました。

#### 【久野委員】

今の内省的のところ、見え消し版の4ページの探究の見方・考え方のところで、高等学校と小・中学校と書き分けてあると思うんですが、高等学校の場合、4ページの一番下の行のところ、「実社会や実生活の複雑な文脈や自己の在り方生き方と関連付けて内省的に考えること」、次のページの小学校の方は、「実社会や実生活の文脈や自己の生き方と関連付けて振り返り、考えること」というところで、この内省的のところが、今までの議論では一つものように考えていましたけれども、それはここで高等学校と小・中との間で段があるということは、やはりその間での内省の在り方について、もう少しちょっと説明が必要ではないかなと。

それも踏まえて、先ほどの前半の今までの議論の中でも、内省の質というんですかね、

字義から来る印象と、それから、内省という言葉や思慮深さが含み込んでいるものの小・中と高との間、学校での間の含み込むものの違いのようなものが、ここからは、申し訳ない、うまく表現できないかなと思うわけですが、ここ、大事な点かなと思いました。追加させていただきました。

#### 【鹿毛委員】

関連してなんですけれども、まさに今日、その流れの中で、その内省という言葉がキーワードになって、そこがポイントだなというふうに改めて思っています。

そのときに、先ほど、南郷委員からもありましたけれども、やはりその学習のプロセス、学習過程の在り方というところが、果たして、例えば11ページの一番上の丸のところのいわゆる課題の整理、私はさっきからこだわっているところですが、これ自体は探究のかなというか、これ自体は、探究というのはこれ、こういうふうに表現できるものではないというふうに、もう表面的な感じがするんですよね。

結局、ここが受け取られて単元構成されてしまいますので、実質的に探究が起こってなくても、これがなぞられていれば探究だというふうに受け取られたら、それは誤解なわけですよね。

そういうふうに考えると、その内省なるものが、ちょっとその言葉は違った方が私はいいと思いますけれども、ちょっとそのキーワードを、ちょっと私も何かというのがあればいいんですけど、思慮深さとか熟慮とか、多分はまる言葉がないから困っているとは思いますが、それが改めて今回キーワードになると、要するに本当の意味での探究ということが、今、形だけで問題解決が表面的にされていることを乗り越えることが今回、探究というキーワードでやるんだっただらば、恐らくそこがキーワードになるところを、ここの学習過程のところの在り方にも、何らかの形で文章表現、あるいは、一部の、何ていうのかな、句を挿入する、挿入句でも構わないんですけども、それを入れないと、このままだと、今までとどう違うんだろうというふうになってしまいかねないので、恐らくそこいら辺が全て、今日出たポイントってそこが大きいかなと思いますので、是非御検討いただければと思います。

#### 【村川委員】

済みません、関連するところなんですけれども。この課題設定、情報収集、それから、整理分析、表現のみが探究じゃなくて、実は課題設定の中にも探究がある。実際、この課題で本当にいいのかどうか、この課題が本当に自分たちで追求すべきなのか。この課題の

質、ものを、そのものを問う。あるいは、情報の収集においても、この課題を解決する上で、どのような情報を、どのような手段で見出すきなのか。これも子供たちがいろいろ考えるべきで、発信表現もそうなんですよね。

結局、自分たちがこう解決したこの情報を誰に発信することによって価値が見出されるのか、そういうことをやっぱり改めて子供が考えるということで、それぞれのプロセスにおいて探究があるので、そういうことももうちょっと書き込んだ方がいいかなというふうに思います。

#### 【南郷委員】

今の探究のプロセスは、いろいろ、指導要領の解説であるとか、指導資料などではスパイラルでぐるぐる何回も回しましょうということはもう明記されているところでもありますので、この11ページの2個目の丸の1、2、3、4のところにも、こういうものが、ウォーターフォール型というか、計画的にぱんぱん、ぱんぱんと進むようなものは探究ではないので、数回繰り返される中でというようなものを少し表現していただくといいかなと思いつながら、伺いました。

違う観点で、カリキュラム・マネジメントのところも大きく書き込んでいただいているので、コメントをさせていただきます。10ページ、見え消しの10ページの上から三つ目の丸のところ、いろいろ前回議論があった学校の教育目標と直接的につながる他教科にはない特質を有するということが重要な役割を果たすというふうに明記を頂きました。本当にきれいに整理を頂いて、有り難いなというふうに思います。

是非、そういう意味では、別のところですけども、前に久野委員もおっしゃっていましたが、総則の部分で、今回、第1の4辺りでカリキュラム・マネジメントの実現というようなところとか、新たに加わる場所もあるかと思っておりますので、こういうところでも、総合学習の位置付けというものを明確にしていっていただけるとよいなというふうに思いました。

更に言えば、一つ上の二つ目の丸ですけども、横と縦のつながりという観点なんですけれども、ここで、小学校の6年間、中学、高校のそれぞれ3年間とありながら、後段の方では、小学校から中学校の9年間において、地域でどのような資質・能力を育成するのかを考えていくというふうになっているんですけど、この辺、今の課題としては、全国の地域としては、やっぱり高等学校になった途端に都道府県立になって、ちょっと地域から離れるというところがあります。やっぱり地域の最高学府と呼ばれる高校は結構多いので、

もうちょっとここ、9年間ではなくて、もう少し上の学校段階までを射程に入れて表現を頂くといいかなとちょっと思いました。

#### 【服部委員】

見え消し版の18ページのプログラミングについてなんですけれども、冒頭説明がありました有識者会議の取りまとめを拝見しますと、プログラミング的、この有識者会議の名称そのものが論理的思考力やうんぬんで始まっているのもそのせいだと思うんですけど、プログラミング的な思考を学ぶことが主たる目的のような形で取られ、私はそういうふうを理解したんですけども、そのためには、プログラミング教育が最も有効な手段だろうということ、小学校ではそういうふうな理解で進めるというのは分かるんですけども。

何かこの18ページの書きぶりだと、プログラミング的思考などというのが後の方に出てきて、取りあえずプログラム教育をやるんだと、いろいろな効果はあるけど、その中の効果の、効用、効果効用の一つがプログラミング的思考というふうになんか取られかねないのかなと。両方とも大杉室長が担当しているんで、これは間違いないと思うんですけど、もう一度ちょっと確認して、両者の整合性を取っていただければというふうに思います。

#### 【村川委員】

まず、18ページの方ですけれども、このESDのことも大事だし、このプログラミングも大事なんですけど、例えばこの上から二つ目の丸の2行目から、「持続可能な社会づくりのための構成概念の獲得や資質・能力を育むことを意識した学習を展開する」という言葉だとか、上から三つ目のこのプログラミングのところですけども、3行目、「教科横断的に活用できる『学び方』を身に付ける」、あるいは、「情報手段の操作もできるようにする」。あと、ほかにも、下の方にもあるんですけど、こういうのががと出てくると、何か総合的な学習でいわゆるESDのために何か内容も決めて子供に学ばせるとか、総合的な学習の時間を使って、やはりプログラミング、いわゆる情報操作の学習を主としてやるとか、そういうような動きもちょっと心配されるので、この辺りの文言は少し考え直す必要があるかなというのが一つです。それから、もう一つは、24ページのその下から二つ目の丸なんですけれども、「高等学校が、往々にして総合的な学習の趣旨よりも」うんぬんというものの4行目、「現在では多くの保護者が総合的な学習の時間が重要なものと捉えている」というふうに書かれているんですけども、これ、多分、エビデンスデータがあると思うんですよ。多分そういう研究機関だとか、民間の教育団体がそういう調査をやったデータ、田村視学官がよく使われているとは思いますが、それ、もし出せるものであれば、そ

ういうのを脚注に少し入れられて出した方が説得力があるかなと思いますので、その辺り、また考慮していただければと思います。

#### 【森委員】

私も、18ページのプログラミング教育のところですが、小学校というか、自分がいる教育委員会の考えで言いますと、物すごくこの格差があるんじゃないかと、学校ごとで。物すごく取り組んでいる学校はわっと飛び付いていくと思いますし、これからやろうと思っているところは、えっ、総合でこれもやらなきゃいけないのかというそのおそれをちょっと感じました。

ただ、ここに書いていただいたことで、そのアプリケーションの、とにかくそれをやるんじゃないよと、探究ですよとちゃんと書いてあるので、それを本当に細かく説明しないと、どこでやっていいか今分からないICTの活用のところを、総合の学習で全部やられてしまったら、わずかしかなくなってしまったものが減っていくので、私ども教育委員会としては、そうじゃないよと言っていかなきゃいけないなというのを実感したところではあります。

ただ、探究的な学習の、新聞報道などで、この新しい学習方法だということで、即、それが総合的な学習ではないよということも書かれておりましたので、その辺を丁寧にこれから説明しなければならぬというふうに感じました。

#### 【鹿毛委員】

やっぱり18ページのこと、今、先生方のお話を聞いて危惧しているところです。それはどうしてかというと、カリキュラム・マネジメント、あるいは、単元を構想する際に、プログラミングということを念頭に、先生たちがどういう単元を構想するのかなというのがちょっとイメージが付かないんですね。というのが、探究ということとそもそもプログラミングということがどういうふうに有機的に結び付いているのかと、私は理解もできないし、知識もないんですけど、ただ、ここ、ESDの方は、確かにこういうビジョンを持って内容を構想するという方が分かるんですね。

だから、ちょっとやっぱり水と油みたいな部分がもしかしてあるのかなという。多分、複数の先生方がそれをおっしゃっているということなので、その折り合いの付け方がすごく難しいのかもしれませんが、この少なくとも出し方が、ESDと並んでここにあるのがいいのかということは、ちょっと根本的に考えないと、いわゆる履修漏れじゃないですけど、情報とリンクさせて、内容的には情報、先ほど例示されていたんですけど、体験的

にプログラミングを理解するという学習活動だけだったら、それは総合的な学習の時間ではないので、ですから、その程度でもし終わってプログラミングもやったよね、これがそういうことだよねというふうになりかねない。それは例えば個々の情報であるとか、あるいは、小中高でも、小中でもそういうような内容と結び付けたときに、探究まで行くのかというのがクリティカルなカリキュラムの基準だと思いますので、これはちょっと真剣に表現を工夫していただきたいと思います。

**【大杉教育課程企画室長】**

ありがとうございます。一方で、やはり総合で情報に関することを扱うときに、今後の社会のことを考えたら、プログラミングということに触れないわけにもいかないだろうというふうに思います。

もう思いも寄らない身近なところで、それがもう不思議な箱ではなくて、私たちが生み出したものであって、その中でいろんなことを実現するためにプログラミングが働いているということ、そのこと抜きに、情報に関する学びということが今後あり得ないということが考えられるのではないかということが、ある意味、有識者会議の視点でもあるわけです。

情報化ということの中で、プログラミングがどんな役割を果たすのか。ただ、時代の変化の中ですたれていくようなものを扱うのではなくて、もう少し人間とコンピュータの関わりということも本質的に捉えた、その中で探究が学べるというようなことは、少しヒントがいろんな事例で見えてきていますので、それをしっかりと掘り下げて、普及できるようにしていきたいというふうに思います。ありがとうございます。

**【久野委員】**

ありがとうございます。今の議論にも少し関連するのかもしれませんが、例えば今のプログラミングの私自身の認識からしても、恐らくまだ十分認識し切れていない、その唐突感というのは恐らくあると思うんですね。と同時に、これ、前もほかの教科との関連のところでも申し上げたことがあるんですが、やはりそれぞれがお互いに前へ進んでいる教育課程なりコンテンツなり、認識なりの中で、やはりプログラミングというものが恐らく私が今、自分で認識しているよりも、恐らく前の方に、2030年を目指した社会ということですので、恐らく来るんだろうと思います。

その一つ前に掲げてあるESDについても、当初は環境学習のように誤解されて、今でもそういうこともあるんですけども、そうじゃなくて、人権があったり、ジェンダーの間

題も含み込んで、より包括的であり、内容だけじゃなくて、質形成の分も含んだものだということが次第次第に認識として共有されてきているかなというふうには思っています。

そういう意味で、この情報活用、プログラミングという言葉も、体験という言葉も折に触れ、出てきますけれども、少しずつ浸透していくのではないかというふうに予想しています。

それを踏まえて、その17ページ、見え消し版の17ページの(3)のタイトル、(3) 現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直し、恐らくこの辺りで、ESD、それから、プログラミング、それから、一つ消えていますけど、キャリアがありましたね。例えばこの三つをここで書き込む、どのような表題の下で書き込むかによって、これがある種、義務があるとか、あるいは、これは飽くまでも柱なり、事例なりということだというふうにして、その位置付けを見直すことによって、少しは考えられないかということを考えました。

と同時に、もう一つ大きなくりの、ごめんなさい、14ページの最初の……、というのが1点です。

14ページの(1)で、「探究」の意義からの領域構成の見直しというところが、この文章は領域構成のことについて論じているのだろうかというのが少し疑問にありましたので、ちょっとここを、領域ってどのことを言っているんだろうかというのを少し考えたところ、見通せなかったなので、一度考えていただけたらなというふうに思います。これ、2点目です。

そして、3点目ですけども、16ページの一番下、(2)の内容構成、教育内容の構造化のところですけども、最後に、「全体計画及び年間指導計画の作成に当たり」うんぬんというところで、これはページをまたいで、「資質・能力を踏まえた育成すべき資質・能力を明示し」、その次に、17ページの頭、児童生徒や保護者等々にも共有し、「説明し共有することが求めると考えられる」とあります。

この最後の中黒の項目、ページをわたった中黒の項目について、どうしてもこのように続けて書かれると、17ページの方の保護者等に説明し、共有することに重点が行くような気がしまして、むしろ大事にしたいのは、16ページの最後に、16ページが一番下にある「全体計画及び年間指導計画の作成」については、そのような育成すべき資質・能力を明示することが重要なのであると。また、作成された資質・能力については、保護者等と共有することを求めるというふうに一旦文章を区切って、重みが前にもきちんと掛かるようにしたい。

というのは、私、前回の改訂のときも、全体計画、指導計画の辺り、少し中心的にそこでやらせていただいた形がありまして、やはりそこ、ここがやっぱり現場とつなぐ生命線だと思いますので、このところの意味がきちんと伝わるようにしたいなというふうに思っています。

#### 【南郷委員】

17ページの現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直しの部分です。ESDのこととプログラミングのことと、大きな二つの括弧でまとめていただいておりますけれども、私、これは項目自体が現代的な諸課題を踏まえた教育内容ということでもありますので、これって何なのかなというふうに考えると、やっぱりESDの部分でいうと、これだけではなくて、やっぱり少子高齢化とかグローバル化を踏まえた経済の側面であるとか、そういう部分も含めて、ESDというのは非常に包含して視点を示してくれているものなんだろうと思います。一方で、情報活用とプログラミングは、冒頭、大杉室長からも御説明がありましたが、やっぱり技術革新に対応していく力という側面なのかな。

これ、だから、大きく言うと、ESDのところで言いたいことは、持続可能な社会づくりに向けた価値観も含めた力の転換の必要性を視点として是非持ちましょうねと。プログラミングの方は、知識基盤社会における、情報社会における技術革新に対応していく力を付けましょうねと。そういう大きなテーマの下、この二つを書いてくださっているんだと思うんです。

それが、何でしょう、固有名詞が、プログラミングとかESDというのがタイトルに入ってしまうと、ちょっと誤解というか、これをやればいいんでしょうというふうな誤解を生むことを心配しました。書いていることはとてもいいことだと思いますが。

#### 【小林委員】

19ページのところで、先ほどの生活科のところで、服部委員がおっしゃられた特別支援教育の充実のところなんですけど、確かに、何かが難しい場合という、障害の中身に応じてどうするかという言い方もあるのですが、それはそれで大事な配慮になるんですが、UDLの教育の成果を生かして、どの子供にも分かりやすくというような意味で、例えば、学習課題の設定に当たっては、設定されたらそれを明示するとか、主な手順を視覚的に表すとか、その成果の中で現れてきた手立てをどの子供たちにもということが、今度、高等学校に進学した場合のことも踏まえると、大事なのかなというふうに思います。

どの教科においても、こういう書きっぷりになるのかなというふうに思いますけれども、

UDLの視点も入れていただくといいのかなというふうに思いました。

**【恩田委員】**

今、同じ点なんですけれども、19ページの(1)は、どちらかというと、困りを抱えているとか、ネガティブな視点にならないようにという形で書かれていますけれども、実は、後のアクティブ・ラーニングの視点で、もう超深い学びと、もう主体的にどんどん学ぶことについては他を圧倒する力があるんだけど、対話的な学びが苦手だという子が、実は今までの教育システムでは駄目な子という形で評価されてこなかった。結構、学校からは学ぶことがなかったと豪語しているオーナー社長が京都にはたくさんおられるんです。

ですから、やはりそういった、ほんと、エジソンみたいな子が、もう高校であれば、好きなことを思いっきりやれる場が総合的な学習の場、時間にあれば、是非積極的に支援するような、そういう何か文言が混ざればいいなというふうに思いました。

対話的な学びも、学校の中に閉じられているからできないのであって、社会に目を向ければ、そういう人たちはたくさんいると思いますので、是非積極的にそういった人たちを評価できるような、今回、システムになればなというふうに思っております。

**【鹿毛委員】**

今の対話的な学びの視点のところ、今思い付いたことなんですけれども、対話的な学びを行うということは、いわゆる学習活動として目に見えるところだけではなくて、対話的な態度というものがないと成立しないことだと私は思っています、つまり、相手の言うことに耳を傾けるであるとかというような、そういうような態度が基盤になるべきことなので、これはとても、例えばここでもくぎを刺しているように、グループの話し合いをすればいいということではないんですけども、やっぱり共感的な理解であるとか、そのようなことのコミュニケーションですよ。コミュニケーション、対話的なコミュニケーションを積み重ねて、その良さを感じなければ、そういうような構えですよ、心構えのところ、そこいら辺の辺りが、恐らく総合的な学習の時間をこれだけ積み重ねるとできるという、そういうことも恐らく狙われていると思うんですね。

ただ、今のままだと、ちょっとそこら辺が強調されてないところがあるので、何かフレーズでももしかして補えるのであれば、修正していただければと思います。

**【南郷委員】**

24ページの各地域における推進体制や研修等についてです。こちら書き加えていただいて、本当にありがとうございます。大分これで伝わりやすくなったなと思っております。

24ページの上から二つ目の丸のところ、総合学習を担当する教員は、育成する資質・能力を意識し、学習の過程のデザインや児童の主体性とのバランスなどなどを書いていただいているのですが、この中に、教員には、現代社会や地域課題の、現代社会や地域の課題の理解というのはやっぱり必要だと思います。これがない、ないと言ったらあれなんですけど、なかなか地域と接する時間がないので。それから、必要な外部の資源を活用していく力というのもやっぱり必要です。

ですので、このようなことを、後段にあるように、研修等で育んでいく必要があるなと思います。こここのところで、国や都道府県レベルで各地域のうんぬん、かんぬんと研修のことを書いていただいているのですが、ここ、是非市町村も加えてもよいのではないかなと思います。やっぱり地域課題に向き合う教員という意味では、今まさに私の地元でも、市町村レベルで教員研修を充実させたりすることでやろうとしておりますので。

#### 【小林委員】

それじゃあ、条件整備のところ、5. 番の23ページの白丸三つ目、これ、私が以前、ミドルリーダーに仕事が集中してというふうなことでありましたけれども、恐らく総合的な学習の時間についてのカリキュラムを作るとか地域で取材をすとかという時間的な余裕が非常に失われつつある現実がありますので、新潟県の中では、ずっと多忙化解消アクションプログラムというのを何年も前から稼働して策を講じているんですが、もう乾いた雑巾を絞るぐらい、限界まで来ているわけです。

先日、学校事務職員の集まる研修会でシンポジウムがあつて、いわゆるチーム学校の考え方があったわけですが、教員以外のスタッフの充実などによって、教員が研修等に当たる時間的な余裕を生み出すなどの、そういった配慮も文部科学省の政策の中にはありますので、関連付けて記述いただくと有り難いなというふうに思いました。

#### 【松田委員】

本当にここら辺を充実して書いていただいて、おまとめいただいて、感謝にたえません。ありがとうございます。

その中で、23ページから24ページ目にかけて、校長のビジョンとリーダーシップの下、ミドルリーダーに対する配慮もしながら、お書き添えいただいております。もしできれば、その最後のところに、総合的な学習の時間に関して、それを学校全体でやっていくのだという姿勢をお言葉に表していただけると、更に有り難いかなと思いました。

それと同時に、本当にここまでいろいろ書いていただいた上に、更にもしできればとい

うお願いなのですが、ちょっと特に高校に対しては懸念されるほかの教科目での代替ということがとても懸念されている中で、そのような代替が安易になされないというようなことを、何かこの部分でも、どこかに盛り込むことができたならというふうに願望として持っているのですが、いかがでしょうか。

#### 【森委員】

私も5. 番の方の最後の方ですが、今先ほど、南郷委員が言ってくださったみたいに、教員の資質・能力のところはやっぱり市町村も含めて頑張らなきゃいけないというふうに感じたところが1点です。

最後に、コミュニティ・スクールのところを書いていただいて、本当に有り難いなというふうに思いました。前にもお話ししましたが、子供たちが今どんどん社会、地域に出ているんですけど、地域に出ていって、大人の人たちが一生懸命子供たちを応援しようと、何で応援したらいいのかなといったときに、そうか、そういう勉強をしているんだったら、コミュニティも一緒に頑張るよということがここでしっかりと書いてくださっているの、学校としては本当に有り難いなと感じたところです。ありがとうございました。

#### 【久野委員】

一つ前のというか、20ページのところで、今日前半でかなり議論になりましたやはり探究のプロセス、1から4への過程の捉え方のところを、やはりこの「深い学び」、「対話的な学び」、「主体的な学び」等を切り離さないでやはり論じることが大事かなというふうに思っています。

つまり、言い換えると、「深い学び」の過程に向かっていくことで、やはりこの探究のプロセスというのはかなり深められるだろうと思います。なので、前半の部分とこの後半の「深い学び」、「対話的な学び」、「主体的な学び」に向けたと、このところがお互いに相互参照できるような形になれば、文言を余り増やすことなく、つかまえられるかなというふうに思っています。これ、1点目です。

もう一点、24ページの推進体制や研修のところ、ここで2点ほど。

先ほどもどなたかおっしゃっていただきました一つ目の丸のところ、小学校と中学校の9年間のカリキュラム・マネジメント、当然やはり高校におけるカリキュラム・デザイン力というのはやはり重要だろうと思っています。

場合によっては、先ほどちょっと言い忘れましたけれども、小・中の9年間、義務教育の9年間とともに、中学校、高校の中等教育学校の6年間の学びということも恐らく視野に

入れる必要があるだろうと思いました。

もう一つ、下の丸のところですが、教員養成段階のことを触れられていますが、新しい教免法の中に、総合的な学習の時間の指導法という面もあり、これから設けられるようでもありますので、そのことについての言及も必要かなというふうに感じました。

**【見上主査】**

ありがとうございました。

ちょっと私の不手際で、時間をオーバーしておりますが、一通り御意見頂戴できたかと思えます。それで、9回にわたって御議論いただきました。それで、取りまとめ資料につきましては、大部分のところでおおよそ合意は頂けたかと思えますが、ちょっとESDと、それから、プログラミングのところちょっと皆様、御意見、まだおありになるかもしれないということです。

それで、できれば、メール等で御意見をお寄せいただいで、表現については事務局の方にお任せいただくという形でもよろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

**【見上主査】**

ありがとうございます。それでは、そのような形にさせていただきたいと存じます。

それでは、時間も過ぎておりますが、本日の審議はこれまでとしたいと思えます。

9回にわたりまして御議論を頂き、ありがとうございました。非常に活発な御意見、頂きました。私の方は全然苦勞しないで進行できました。また、事務局の方も、皆さんの意見を受けて見事にまとめてきてくださいます。ありがとうございます。今回で一応のめどを付けさせていただきたいと思えます。

また、本日、言い尽くせない分、あるいは、お気づきの点がございましたら、事務局の方にどうぞメールで、あるいは、何でも結構ですが、手段は、御連絡いただければと思います。では、今後につきまして、事務局からお願いいたします。

**【小野教育課程課課長補佐】**

ありがとうございました。本当に9回にわたり、充実した御審議を頂きまして、本当にありがとうございました。先ほど主査からおっしゃっていただきましたとおり、今回で、生活・総合的な学習の時間ワーキンググループの議論をひとまず終了とさせていただきたいと考えております。

また、頂きました御意見を、主査、主査代理とも御相談させていただいてまとめさせて

いただきまして、また、最終的に取りまとめ案ができましたら、お送りさせていただければというふうに存じます。

**【見上主査】**

では、生活・総合的な学習の時間のワーキンググループを終了させていただきます。本当に皆さん、どうもありがとうございました。

— 了 —